

「義烈空挺隊」と「玉砕之地の顕彰碑」

～英霊を二度死なせてはいけない～

奥本康大（「空の神兵」顕彰会）

1 はじめに

「神風特攻隊」と言えば日本人なら大概の人が知っているが、残念ながら同じ特攻隊であった「義烈空挺隊」の存在を知る人はほとんどいない。自分がこの「義烈空挺隊」を初めて知ったのは、今から約 60 年前の小学校四年生の夏に遡る。

その年の夏休みに、父に連れられ和歌山県の高野山での陸軍落下傘部隊の慰霊祭に参列した（高野山には昭和三十一年に落下傘将兵の慰霊碑が建立され、毎年慰霊祭が催されていた。この年からは、自衛隊殉職者も合祀することになった節目の年でもあった）。

父はこの年の慰霊祭で祭典委員長をしたようで、「祭文」の下書きや手記・資料が我が家に遺っている。また、この年の慰霊祭には、「空の神兵」と呼ばれた陸軍落下傘部隊にパレンバン奇襲攻撃を下命した当時の第二飛行集団長、菅原道大元中將が来賓として参列された。

菅原元中將は、前日にわが家に宿泊され、私も父たちと一緒に高野山に向かったので、そのときの様子は今でも鮮明に憶えている。

慰霊祭での来賓挨拶で、菅原元中將が呼びかけられた「奥山、諏訪部の両君」の言葉が今でも私の脳裏に鮮明に残っている。

このお二人の名前が英霊であることは子供でも理解できたが、当時は小学生であり、「義烈空挺隊」が何たるか、また、奥山、諏訪部のお二人がどのように散華されたのかも知る由もなかった。また、詳しく知ろうともせず、長い年月が過ぎた。

恥ずかしい限りであるが、父の遺した手記から詳細を知ったのは数年ほど前である。奥山大尉、諏訪部大尉と父との繋がりがあまりにも深く、私が父の遺志を継いで慰霊と顕彰をしなければと感ずるようになった。これは十年前に旅立った父からの遺言だったのかもしれない。もしかしたら、今ではほとんど語られない義烈空挺隊の英霊が嘆き悲しみ、縁者でもある私を頼ってこられたとも思えるのである。



出撃時の奥山隊長と諏訪部飛行隊長

二、奥山道郎大尉と挺進第一連隊

義烈空挺隊長奥山大尉の軍歴を調べてみた。奥山大尉は落下傘部隊創設期からの隊員であったが、実戦の場は唯一、沖縄での義烈空挺作戦のみであった。悲運の軍人ともいえる。その軍歴を辿ると三重県出身、千葉中学から幼年学校を経て陸軍士官学校に進み（陸士五十三期）、昭和十五年末に創設間もない挺進練習部員（練習部長：河島慶吾中佐）に選抜された。そのとき召集された部員は十三名、すべて将校だけで、落下傘のイロハから研究をはじめたのである。奥山大尉はいわば落下傘部隊の草分け的存在であった。

陸軍落下傘部隊といえば「空の神兵」と讃えられたパレンバン奇襲攻撃を思い浮かべるが、奥山大尉は創設期からの隊員なのにパレンバン奇襲作戦には出撃していない。

パレンバン奇襲攻撃の命令が最初に下ったのは奥山大尉が所属する挺進第一連隊であった。

大東亜戦争開戦直後、挺進第一連隊は門司からパレンバンに向けて出港した。しかし、途中、海南島（中国南部のベトナムに近い島）付近で輸送船が火災事故を起こし沈没、将兵たちは海に投げ出されてしまった（当然、落下傘、武器弾薬もすべて海中に没した）。奥山隊長も南シナ海を暫く漂流され、救助されたのである（将兵たちは疲労困憊しており、すぐに実戦投入できる状態ではなく、暫くは休息が必要であった）。

このため、パレンバン奇襲攻撃を断念する動きもあったが、急遽、挺進第二連隊（連隊長：甲村武雄中佐）を編成、練習部の隊員を掻き集め、約二週間後には門司から慌ただしく前進基地プノンペンに向け出帆したのである。

飛行機からの降下経験の少ない隊員がほとんどの「俄か仕立て」の挺進第二連隊が、パレンバンでは神憑り的な大勝利を齎したのである。

手柄を横取りされた形となった挺進第一連隊の隊員たちは大変悔しがったそうだ。

挺進第二連隊の隊員たちは、配属されて間もない者ばかりであり、実際に飛行機からの降下回数は三回～五回くらいだったと伝え聞いている。

余談であるが、四年前にパレンバン作戦に参戦した衛生兵だった坂井清さんを岡山に訪ねて聞いたとき、「私は三回しか飛行機から降下訓練をしていない」と話して下さった（参考までに記述するが、現在の陸上自衛隊第一空挺団には数百回の降下経験がある隊員もいると聞いている、数十回クラスは、ザラにいるようである）。

この未熟な挺進第二連隊の隊員たちが、二十四時間程度でパレンバン飛行場と二ヶ所の製油所を制圧したのだから「奇跡」「神懸かり」と言うしかない（昭和十七年二月十四日のことである）。この大勝利により年間約三百万トンの石油を手中に収めた。当時の日本の石油消費量は年間約五百万トンだったことから、日本国中が狂喜乱舞したのは容易に想像できる。また、その後に派遣された石油技術者が装置を修復・改造したり、油田を開発したりして、年産約六百万トンまで増強させたと記録にある。

石油の確保は、まさしく日本の命運を賭ける生命線でもあり、パレンバンの勝利が、約三年半にわたり戦争を継続できたと言っても過言ではない。

ある著名な戦史研究家はパレンバン作戦の戦果は真珠湾攻撃の戦果の十倍に相当すると断言されるのも無理はない。

「石油の一滴は血の一滴」とまで言われた石油が確保できなければ、一年程度でアメリカの軍門に下るしかなかった。あるいは、アメリカ、イギリス、フランス、オランダなどによって日本は分割統治され、日本は消滅していたかも知れない。そんな土俵際の戦いがパレンバン奇襲攻撃であったことを知る人も少ない。

父（奥本實）はこのパレンバン奇襲作戦で殊勲甲の手柄を立て、昭和天皇に単独拝謁を賜る栄誉を得たが、この海難事故がなければ、挺進第一連隊の奥山大尉か他の隊員が、パレンバンの英雄になっていたかも知れない（軍隊は運隊と言われるのもっともな話である）。

この挺進第一連隊は不運だったが、一度だけ檜舞台に立てたことがある。昭和天皇は大量の石油を確保したパレンバンの大勝利を殊更にお喜びになり、落下傘部隊の特別演習を観閲されたのである（昭和十七年七月、於宇都宮練兵場）。この栄えある天覧演習において降下展示をしたのが、挺進第一連隊だったのである。

その後、挺進第一連隊は空挺作戦に投入されることなく、厳しい訓練に明け暮れるのである。正しくは作戦の準備に入るが、何らかの理由で中止や延期になってしまったのである。

ラジオ作戦、東ニューギニア作戦等への投入を計画されたが、地上部隊と連携の取れない作戦には落下傘部隊の投入は見送られた（海外の落下傘部隊の損耗率は五十%を超えている）。

父と奥山大尉とは何かと繋がりが深かったようである。所属連隊は違えども宮崎県の唐瀬原で一緒に降下訓練をした仲間であった。

父が遺したアルバムには、第一挺進団（第一連隊・第二連隊）が東ニューギニアの高地にあるベナベナ飛行場およびハーゲン飛行場を制圧する作戦が起案され、前進基地であるペリリュー島に奥山大尉たちと一緒に駐屯していた写真がある。

父の手記にも挺進団長、河島慶吾大佐（練習部長時代は中佐）率いる第一挺進団が前進基地となったペリリュー島に駐留していたとある。奥山大尉と父と共に出撃に備えてペリリュー飛行場の十字滑走路を使って訓練を重ねていたのだ。残念ながら2ヶ所の飛行場は三千メートルの高地にあり、地上部隊の支援が困難なことを理由に見送られてしまった（昭和十八年七月～十一月の四ヶ月ペリリュー島に駐留）。

その後、この挺進団は国内に帰還し宮崎で訓練を重ねていた。その後、父は本土決戦要員として静岡第九十七連隊に転属し、空挺部隊の奥山大尉との繋がりも途絶えるのである。

昭和十九年秋頃、奥山大尉は挺進第一連隊第四中隊の中から選抜された百三十六名からなる義烈空挺隊の隊長に任命された。

義烈空挺隊は、敗色濃厚な硫黄島作戦、サイパン島作戦への準備に入るが、いずれも実行されることはなかった。

昭和十九年末、フィリピンのレイテ島において挺進第三連隊、挺進第四連隊で構成された高千穂部隊が落下傘降下するも玉砕。

昭和二十年になると、米軍が沖縄本島に上陸、本土への空襲が激化し、沖縄奪還作戦に投入されたのが奥山大尉率いる義烈空挺隊であり、米軍に奪われた北・中飛行場への攻撃命令が下ったのである。

三、義烈空挺隊（陸自第一空挺団資料より抜粋）

義烈空挺隊への出撃命令は沖縄本島の読谷（北）および嘉手納（中）にある米軍に奪われた飛行場にある敵航空機および敵飛行場機能を破壊することが任務であった。

昭和二十年五月二十四日、熊本の健軍飛行場から出撃した挺進第一連隊第四中隊を基幹とする百三十六名と彼らを輸送する第三独立飛行隊の操縦士等三十二名、合計百六十八人名が十二機の爆撃機に分乗し沖縄に向かったのである。指揮を執る奥山道郎大尉（出撃時少佐に進級、死後、大佐に特進）は、二十六歳の若さであった。熊本の健軍飛行場で諏訪部大尉（陸士五十四期）率いる第三独立飛行隊と合流した「義烈空挺隊」は五月二十三日出撃の予定だったが、天候不良の為一日延期して翌日五月二十四日午後六時十分、夕闇迫る健軍飛行場から出撃したのである。

隊員は淡緑色戦闘服に墨で迷彩を施し、最新兵器と爆薬を背負い、鬼気迫る姿であった。

部隊は無線封鎖で沖縄を目指したが、うち四機はエンジン故障（火災？）および不調のため、九州南部の水田、河原、畑等に不時着（殉職一名）したと記録にある。他の機体は対空砲火で撃ち落とされ、たった一機（五百四十六番機）のみが強行着陸に成功した（米軍記録）。午後十時十一分、健軍飛行場通信基地にたった一文「只今突入」の暗号無線を送信したとある。

米海兵隊航空史（巻三十一）によれば、「第五番目の飛行機は、指令塔より約二十五フィート北東より南西の伸びた滑走路に車輪を下ろさず着陸。推定十二名の日本兵も無事着陸、少数の勇敢な者が如何なる事を成し遂げるかを示した。着陸とほぼ同時に爆薬による飛行場航空機の炎上が始まった。（中略）航空機三十三機が損害を受け、七万ガロン（ドラム缶約千三百本）のガソリンが燃えた。この捨て駒による混乱は殆どのものが想像することが出来ないだろう。（中略）全体的に評価するならこの『義烈空挺』作戦は成功とみなすことが出来る。」と記されている。

なお、この義烈空挺隊には十名の中野学校出身者が含まれていた。彼らは飛行場破壊後にゲリラ戦を展開する役割を担っていたが全員戦死（一名は残波岬付近まで追い詰められ射殺された）。

諏訪部大尉は父（奥本實）と陸士同期生であり、『偕行』の昭和三十七年八月号に「義烈飛行隊長諏訪部忠一中佐を憶う」と題して寄稿している。機会があれば改めて紹介したい。

また余談であるが、義烈空挺隊の調査で新たな事実が判明したことを追記する。

熊本県在住で102歳である陸士53期の牧 勝美元陸軍少佐にお会いし取材することが出来た。

牧さんは、飛行第一百戦隊の整備隊長を終戦まで務めておられた方である。牧さんのお話では、義烈空挺部隊の出撃直前に先行して飛行第六十戦隊、飛行第一百戦隊各六機計十二機が攻撃目標のアメリカ軍が占拠する読谷飛行場、嘉手納飛行場の高射砲陣地を破壊すべく出撃したのだ。彼らの直前の空襲攻撃により義烈空挺隊は戦果を揚げる事ができたとも言える。

また、かれら戦闘機部隊の報告では、沖縄に着陸出来たのは一機ではなく数機が着陸出来たと牧さんは証言されている。作戦において、各機、無事着陸した場合は、隊員は照明弾を上げる手筈になっており、その時に上がった照明弾は五発と戦闘機部隊の報告を牧さんは受けておられる。

当時の戦果は確認することが出来ず、戦果はすべてアメリカ軍の報告だけであり、アメリカ軍は戦果を過少に発表したとも考えられる。何故なら、一機だけの隊員だけで真っ暗闇の飛行場で、これだけの戦果をあげるの容易ではなく、恐らく戦闘機部隊の報告の着陸機数は数機あったと考え

られる。また、アメリカ軍が飛行場内で收容した日本兵の遺体の数も約七十体とあるから、着陸後の戦闘で戦死されたと思われる。



読谷飛行場に胴体着陸した一機

四、義烈空挺隊玉砕之地の慰霊碑について

約五年前、初めて沖縄読谷村にある義烈空挺隊玉砕之地を戦史研究仲間と慰霊のために訪ねた。慰霊碑は読谷村役場近くのサトウキビ畑のなかに建っている。近くの忠魂碑が目印になるが、探すのに一苦労する場所にあった。傍らには旧陸軍が戦闘機を格納した掩体壕が残っているが、地元住民でも知らない人が多いようだ。

私たちが現地を訪れた時には、隊友会名誉会長の石嶺邦夫さんに義烈空挺隊に関する説明をして戴いた。また読谷村における義烈空挺部隊の慰霊碑に対する住民感情等について詳しい説明を受けることができた。

石嶺さんは反戦感情の強い沖縄県読谷村で永年にわたり慰霊碑を護ってこられた中心人物である。石嶺さんたち隊友会のメンバーが慰霊碑を護ってきたと言っても過言ではない。

簡単に石嶺さんたちの活動やご苦労話を紹介する。石嶺さんは読谷村出身の元自衛隊員。あるとき、米軍の新兵研修の集団がサトウキビ畑に入って行くのを目撃。恐る恐る後を追うと、朽ちた慰霊碑（木柱）の前で、新兵たちに義烈空挺隊の説明をしている場面に遭遇したのである。

敵であった米兵が、日本兵の勇猛果敢さや特攻戦法を教えていることに驚くとともに、北飛行場に強行着陸した場所に建てられていたこの慰霊碑の管理を決意されたようだ。

それ以降、周辺の雑草を刈込み、慰霊碑と判るように花壇まで作り、心を込めて英霊供養をされてきた。しかし残念なことが起きたのである。反政府感情の強い土地柄は、玉砕之地に慰霊碑を設置しておくことを許さなかったのである。

読谷中学校新校舎の建設が決まり、慰霊碑を移転させるよう村役場から求められたのである。普通なら、学校の隅に歴史的建造物があっても何ら問題にはならない。まして場所はグラウンドの片隅である。余談であるが「教育勅語」等を草稿した井上毅の生誕之地碑は、熊本市立必由館高校の正門脇に立派な「石碑」と「産湯の井戸」まで保存されている。

戦場となった沖縄県読谷村の人たちは、英霊に対する捉え方が全く違うのである。同じ日本人と

して悲しい話である。



永年玉碎之碑を護ってこられた隊友会の石嶺邦夫さん

五、沖縄平和祈念公園の義烈碑

国定公国内の東部、糸満市摩文仁地区に平和祈念公園がある。ここには沖縄戦没者墓苑、平和の礎・黎明之塔、日本各県出身地別の慰霊碑等があり、その一角に義烈空挺隊の慰霊碑もある（昭和五十一年五月建立）。

石嶺さんによると、読谷村役場からは、旧北飛行場の着陸地点の慰霊碑を移動させられたとき、慰霊碑はいつでも撤去出来る簡素なものにすることを申し渡されている（よって未だに木製の碑となっている）。また、摩文仁の丘にある義烈慰霊碑があるから読谷村の玉碎之地の碑は不要ではないか？との余計な提言までされたとのことである。しかし、慰霊碑とはそんなものではない。ましてご遺族の心中を察すると、簡単に玉碎の地から撤去することなど有り得ない話である。

石嶺さんの話では、読谷村を訪れる遺族は絶えないとのことである。義烈空挺隊の隊員は独身者がほとんどであり、戦後八十年近く経過すれば、親、兄弟等、英霊の肉親の方はほとんど鬼籍に入られたはずである。しかし、今も訪れる人たちが絶えないのは、英霊の親族や、また史実を知る一般の多くの人たちが、歴史を風化させないために、慰霊供養を訪れるのであろう。こんな人たちの気持ちを逆撫でする動きがあることに憤りさえ感じている。

最近、また新たな動きがあると石嶺さんは付け加えられた。読谷村役場付近には公共施設が多くあり、その一部の運動公園駐車場の拡張計画が浮上しており、慰霊碑の撤去を打診されているようだ。この話の実現すれば、義烈空挺隊玉碎之碑は読谷村から消失することになる。

この話を聞いて、なんとも居た堪れない気持ちに陥ったのは、私をはじめ慰霊に訪れた仲間全員同じであった。こんなことが、沖縄県読谷村で進められていることを広く世間の人に知らさなくてはとの衝動に駆られた。

参考までに記すが、旧読谷飛行場の滑走路は現在、村役場への進入道路になっている。その道路

の近くの交差点横には広場が二カ所あった。広場内には自虐的な戦争非難の石碑が多数設置されており、沖縄県の抱える反戦感情や国防問題に対する根深さを感じた（正しい歴史認識ではない気がしてならない）。

六、恒久的な慰霊碑の建立について

大東亜戦争の史実が風化しつつある現在、正しい史実を後世に伝えなければと考えている。父の遺した手記を基にして、書籍（『なぜ大東亜戦争は起きたのか？—空の神兵と呼ばれた男たち』）を出版したことを契機に時間の許す限り、英霊の慰霊と顕彰活動をするようになった。

また、依頼があれば「空の神兵」の偉業についての講演だけでなく、大東亜戦争の歴史的背景や資源を持たない日本のエネルギー問題についての講師を務めるようになった。

目的は、あまりにも自虐的になっている世の中に対して警鐘を促すためである。

先人の正しさを伝え、日本人が自信と誇りを取り戻すことができればと微力ではあるが声をあげている。

沖縄の慰霊の旅で知った義烈空挺隊玉砕之地の碑を撤去させられることは、絶対に回避させたい。また、現在の木製の簡単に撤去可能な碑ではなく、碑文も備えた恒久的に朽ちることのない慰霊碑建立こそが国のために命を賭して散華された英霊に対し感謝の誠を捧げる方法ではなかろうか？

なぜこのような状態になっているかを推察すると、読谷村が土地を提供してくれないことにも原因があるように思えてならない。しかし、読谷村役場の広大な敷地の中には、義烈空挺隊の慰霊碑を建立できる場所はいくらでもある（あえて付け加えるが、読谷村役場は地方都市の市役所以上の立派な建物である）。



村役場とは思えない立派な読谷村役場

沖縄県は、千島、樺太と同じく、日本で戦場となったことで、戦争に対する嫌悪感があるのは判らなくないが、国の英霊を正しく慰霊・顕彰出来ずに、恒久平和が得られるはずがない。

沖縄を守るために日本各地の若者が沖縄に出撃して散華された。このことを沖縄県民や読谷村民はどう捉えているのであろうか？義烈空挺隊の隊員にも二名の沖縄出身者がいたのである。山城准尉と比嘉伍長である。

正しい歴史認識のもと義烈空挺隊玉砕之地の碑が、堂々と殉難の地に建立されることを願って止まない。



沖縄出身の山城准尉（左）と比嘉伍長